

# 「天国よいとこ」

(藤子・F・不二雄大全集 『モジャ公』)

文学部3回生 仁方越洪輝

かつては銀河系最古の文明をほこっていた星“シャングリラ”。かれらの滅び去った後は住む人もなく、無人ロケットの探査報告によれば、そこは、暗く、冷たく広がる死の世界。送りこまれた調査隊からの第一報はみな同じで、「すばらしい！天国のような星です」。しかし、やがて連絡が絶え、帰ってきた者はいない……。

この“シャングリラ”という星にモジャ公たちが向かうという話だが、『モジャ公』がどういふ話かご存じない方も多いと思うので簡単に述べると、モジャ公、空夫、ドンモの3人が宇宙へ家出し、いろんな星へ行くという話である。

さて、冒頭部分だけでも不気味さが漂い、文字で見ただけだと、おどろおどろしい感じがするが、そこはギャグ漫画である。この3人、基本的に憶病であり、“シャングリラ”のような得体のしれない星にあえて向かうはずはない。しかし、ある事情から記録映画作家タコペッティの宇宙船に乗ることになり、タコペッティと共に仕方なく向かうのである。そんな不気味な星に行きたくないとい泣いたり怒ったりするモジャ公たちの表情が面白くて、それだけで笑えてくる。

そう、基本的にギャグ漫画なのである。3人は危険な目に遭っているのに、ツッコみどころ満載の表情、言い回し、行動などに、つい笑ってしまう。ギャグが最高な「アステロイド・ラリー」という話もあるが、不気味さ漂うストーリー展開に加え、オチも決まっている「天国よいとこ」をまずはお勧めしたい。

藤子・F・不二雄先生の作品は、ただ楽しむだけでも最高に面白いのに、心のどこかにひっかかって、考えさせられる部分もあることが魅力の一つだと思う。この「天国よいとこ」は、そのような作品の最もわかりやすい一例である。ギャグとして楽しめるといふ面ばかり説明したけれど、真面目に読んでも色々と考えさせられる素晴らしい作品である。

あらすじをすべて説明するだけでも面白くなる確信はあるが、マンガとして読むことでその素晴らしさは格段に際立つ。一コマコマ楽しみながら、じっくりと読んでもらいたい作品である。ぐだぐだと御託を並べていても「もうたこさん！いや、たこさんだっ。」となってしまうだろう。とにかく一度手に取って読んでみてほしい。